

現代女子大学の自己認識に関する一試論

— 学長メッセージの内容分析 —

橋 本 鉦 市*
小 原 明 恵**
加 藤 靖 子***

— <要 旨> —

本研究は、女子大学の自己認識の布置構造と変容を、学長(の言説)から計量的に分析することを目的とした。まず各大学のウェブサイトに掲載された学長メッセージを収集してその内容分析を行い、いずれの大学にも共通する、もしくは差異のある要素を抽出し、さらに女子大学から共学化した大学群との比較においてその変容を分析した。分析の結果、学長メッセージでは「育成する人物像」に関する言及量の割合が最も高かった。さらにその内容を精査すると「感性・品性・人間力」を挙げる大学が最も多く、次いで「自立・主体性・向上心」「社会貢献」「専門性」「倫理観・奉仕の精神」「教養・知性」など女子大学共通の項目が析出された。とくに共学大学との比較において、「感性・品性・人間力」「自立・主体性・向上心」の両者が、最も女子大学としての自己認識の中核であることがわかった。さらに大学の属性別の分析によって、各大学の育成人物像は内面的に豊かな人間像と社会的に活躍するそれと大きく二分されており、それらは偏差値構造および伝統校か否かの影響を強く受けていることがわかった。

1. はじめに

日本の18歳人口は、1992年の205万人をピークに減少し続け、ここ数年は120万人前後で推移していたものの、2018年度からは再度減少に転じ、

*東京大学大学院教育学研究科・教授

**東京大学大学院教育学研究科・博士課程大学院生

***東京大学大学院教育学研究科・博士課程大学院生

2031年には100万人を割ると予測されている。こうした状況の中で、わが国の女子大学は4年制大学779校のうち77校(9.9%)を占めている¹⁾。米国では1.3%²⁾、中国では0.2%³⁾、韓国では3.7%⁴⁾であるから(全て4年制大学、短大は含まず)、その割合からみてもわが国における女子大学のあり方は国際的に見ても特異であると言える。わが国においては、女子大学は現在においても依然として存在感を維持し続けているのである。

しかしながら、女子大学をとりまく社会的状況はこの30年でかなり変化している。河上(1986)は、女子大学は結婚をルートとした地位達成機能と、女子大学自体の地位表示機能によって一定の人々の需要に応じてきた側面があるとし、その存続はこの需要が持続するか否かに大きく左右されるだろうと予測した。さらに、共学大学にも地位表示機能を持つ大学があり、女子が結婚以外の地位達成ルートを重視するようになれば、職業的能力育成の上で不利な状況にある女子大学の需要は減少するだろうと述べた。果たして、河上の予想は的中しつつあるように見える。2000年代に入り共学化する女子大学が増加し、2016年現在私立女子大学72校のうち、複数実施している入試のいずれかでボーダーフリー(BF)がついた大学が約半数を占めるなど⁵⁾、30年前と比べ女子大学の相対的な地位は低下しているように見える。このような厳しい社会的状況の中で、女子大学は外部環境にどのように対応しようとしているのであろうか。女子大学を支えてきた地位達成・地位表示機能の需要が現在は消滅、または減少しているとすれば、女子大学は自らの機能について新たに捉え直していると思われる。

さて、女子大学の今日的なあり方については、ブランディング、学生募集方策、経営戦略、などからの調査・考察も少なくない。しかしながら、こうしたマネジメントを中心とする視点だけでは、経営的な意思や戦略の側面は理解できても、大学という組織がもつ認識を包括的に把握したとは言いがたい。外部環境への組織的対応(とそのパターン)の考察には、その変容と圧力の中でいかに自己を位置づけるのかという構成員の認識構造を包摂した分析が不可欠である。しかし、こうした大学という組織(とその構成員)の自己認識の分析は、従来の研究の系譜からは看過されがちであった。本研究に引きつけて言えば、女子大学が今日の社会状況にいかに適応しようとしているかを考察するには、何よりもまず、女子大学の構成員らがどのような認識を持ち、またそれらが共有化され、さらにいかに正当化されているか、を問う必要がある。

そこで本研究は、女子大学が現代の激しい環境変化にいかに適応しよう

としているかについて、構成員の認識から課題解明を試みてみたい。しかしながら、構成員全体の認識を一つ一つ拾い上げるのはきわめて困難である。そこで本研究では、個々の女子大学をガバナンスする学長を、大学内の構成員（ミクロレベル）の認識を収斂しつつ、大学を取り巻く外部環境・社会（マクロレベル）とをつなぐ結節点（メゾレベル）として位置づけ、彼らの言説に焦点を絞りながら、その内容を計量的に分析することによって考察を進めたい⁶⁾。具体的な分析手法としては、各女子大学のウェブサイトに掲載された学長メッセージの内容分析を行い、横断的には現代女子大学の自己認識の分布をクラスター化して、いずれの大学にも共通している要素ならびに他大学との差異を、また女子大学から共学化した大学群との比較においてその変容を分析する⁷⁾。

2. 先行研究 — 女子大学の自己認識論の系譜

さて、女子大学については、これまでも設立・発展過程における歴史（山田 1984、畑中 1999、真橋 2012、湯川 2013 など）をはじめ、女子の高等教育機会の拡大（天野 1986）、地位表示的な機能を有する高等教育歴（天野 1985）、専門的人材・リーダー養成（橋本 2007、井上 2014）、カレッジインパクト（三宅 2009）など、女子（高等）教育との関連の中で、様々な側面から研究が蓄積されてきた。また前述のように、女子大学自身の今日的なあり方については、ブランディングや経営戦略などからの考察も現れてきている（喜村 2011、佐野 2002 など）。

ところで、1970年代半ば以降、共学化する女子大学が現れてきたことなどを背景に、女子大学のあり方に対し社会的な関心が集まるようになるに伴い、その存在意義をテーマとする研究も現れた。法律的な側面から考察したものもあるが（青柳 1984、磯野 1994）、従来は女子に対する教育的効果や社会的機能、女性の社会的地位向上に果たす役割の有無の点から考察されてきた（村田 1983、河上 1986、佐藤 1994、山本・藤村 2000、馬場 2005 など）。こうした流れの中で、近年では女子大学の相対的な社会的地位低下に伴い、生き残りという課題に関連して共学大学との差別化を目指し、「女子大学の特徴とは何か」を明らかにしようとする研究が増えてきている。このような研究には、旧制専門学校、新制大学開学年、設置者、学生数、偏差値などの属性から女子大学全体の特徴を分析したもの（安東 2006）や「本学はどのような大学であるのか」という各大学の自己認識を考察する

ものがある。後者には、例えば、女子大学の学生募集パンフレットのキーワードや紙面構成を考察した井上ほか(1996)、大学ウェブサイトの学長挨拶を分析した森山(2005)、大学案内パンフレットの自己紹介部分と自己評価報告書の女子教育・女子大学に関する記述を分析した安東・鎮(2008)がある。また、岡田(2002)は、学校の記念出版物の建学の精神に関する記述を分析し、頻出キーワードを分析、類型化した上で、各類型のキーワードの平均出現率と大学の属性との関連性について検討している。さらに、自己認識論とは異なり経営戦略的な視点が強いが、佐野(2002)も大学パンフレットの学長挨拶と大学紹介部分で大学が自ら記述している個性について計量的に分析している。

しかしながら、森山(2005)、安東・鎮(2008)は、計量的な分析ではなく、記述的な分析にとどまり、属性との関係を明確に示せていない。また、井上ほか(1996)は調査対象が少ない上に関西圏に偏り、キーワードの抽出手順などに統計的な問題がある。一方、岡田(2002)は、女子大学の自己認識を計量的に考察した点で実証的ではあるものの、1986年発行の資料を使用している上に、建学の精神をその対象としたところに限界がある。すなわち、建学の精神は「組織の性格を決定付ける重要な要素」(岡田 2002: 27)であるとはいえ、多くの場合、設立当時の文脈に関連づけられて記述されており、現在の組織メンバーが有している自己認識とは言い難い。そのため、今日的なあり方を考察するには至っていないのである。佐野(2002)は、2002年度の資料を計量的に分析しているため、その点については問題がない。とはいえ、共通して言及の多い「教育の特色」「伝統」などのキーワードと創立年など大学の機関特性との関係を分析したのみで、キーワードで語られる内容を考察していない。一言で「教育の特色」と言っても、そこで語られる内容にこそ大学独自の自己認識が現れる可能性がある。

そこで本研究では、これらの先行研究の課題をふまえつつ、女子大学の今日的な自己認識を計量的に分析することとする。

3. 分析対象と方法

それでは、本研究の分析対象と方法を確認しよう。

分析対象とする女子大学は、2016年7月現在存在している日本の女子大学のうち、後述する「学長メッセージ」が大学ウェブサイトに存在する70大学である。また、女子大学と比較する目的で、女子大学から単独で(既

存の共学大学に統合されることなく) 共学化した大学のうち、「学長メッセージ」が存在する 45 大学も取り上げる⁸⁾。

本研究は前述の通り学長の言説に焦点をあてるが、分析対象には各大学の公式ウェブサイトに掲載されている「学長メッセージ」のテキストデータを採用した。これは各大学の公式ウェブサイトの「学長メッセージ」、「学長挨拶」、「学長室より」というようなページに掲載されているテキストである。テキストの収集は 2016 年 5 月から 7 月にかけて行った。大学組織の中核である学長の名前を冠して書かれたこのメッセージは、受験生など学外から自大学に向けられる目を強く意識した上で自大学をアピールするものであるが、同時に学長の個人的な意見も入り込む性格を持つため、学長による自大学についての認識が表出された文章と捉えることができる。また、学長メッセージは自大学の特徴を読み手にわかりやすく伝えるために平易な言葉が用いられ、難解な言葉は言い回しを変えて説明されることが多いため、公式な文書である認証評価、自己評価点検報告書、アドミッション、カリキュラム、ディプロマに関する 3 つのポリシーや、短い言葉で言い切る広告と比較して、大学の自己認識をより具体的に表出した文章と考えることができるだろう⁹⁾。

前節で述べた通り、計量分析を行わなければ大学属性とテキスト内容との関係を明示しにくい。一方、テキストをそのまま計量分析した場合、個々の語が出現する文脈の把握・統制が難しいという問題がある。そこで本研究ではこれらの問題を解消するため、まずテキストデータをコーディングしてコードを生成した。そして、大学ごとにコードを付した箇所の文字量やコードの言及の有無、コードの言及回数のデータを作成し、それらのデータに大学の属性変数を結合したデータセットに対して計量分析を行った。コーディングには MAXQDA12 を使用し、執筆者の間でトライアングレーションを行った。また計量分析には R3.3.1 を利用した。

大学の属性変数には、設置者 (国公立・私立)、設立年、宗教、学生数 (2017 年)¹⁰⁾、ボーダーフリー大学 (以下、BF) か否か¹¹⁾ を使用した。設立年は、新制大学の設立ラッシュが一段落する 1951 年まで、1952 年から女子の大学・短大進学率が 30% を超える直前の 1974 年まで (女子大学の拡大期)、1975 年以降の 3 つに分けた。宗教は、カトリック、プロテスタントと聖公会¹²⁾、仏教、非宗教の 4 つに分けた。学生数は、1000 人以下、1001~2000 人、2001~3000 人、3001 人以上の 4 つに分けた。表 1 は分析で用いる大学の属性変数の記述統計量である。

表1 分析に用いる独立変数の記述統計量

		女子大 (n=70)		共学化大 (n=45)	
設置者	国公立	4	(5.7%)	3	(6.7%)
	私立	66	(94.3%)	42	(93.3%)
設立年	～1951年	24	(34.3%)	5	(11.1%)
	1952～1974年	24	(34.3%)	23	(51.1%)
	1975年～	22	(31.4%)	17	(37.8%)
宗教	カトリック	10	(14.3%)	3	(6.7%)
	プロテスタントと聖公会	16	(22.9%)	2	(4.4%)
	仏教	4	(5.7%)	5	(11.1%)
	非宗教系	40	(57.1%)	35	(77.8%)
学生数	～1000人	14	(20.0%)	14	(31.1%)
	1001～2000人	21	(30.0%)	16	(35.6%)
	2001～3000人	18	(25.7%)	5	(11.1%)
	3001人～	17	(24.3%)	10	(22.2%)
BF/	BF	31	(44.3%)	24	(53.3%)
非BF	非BF	39	(55.7%)	21	(46.7%)

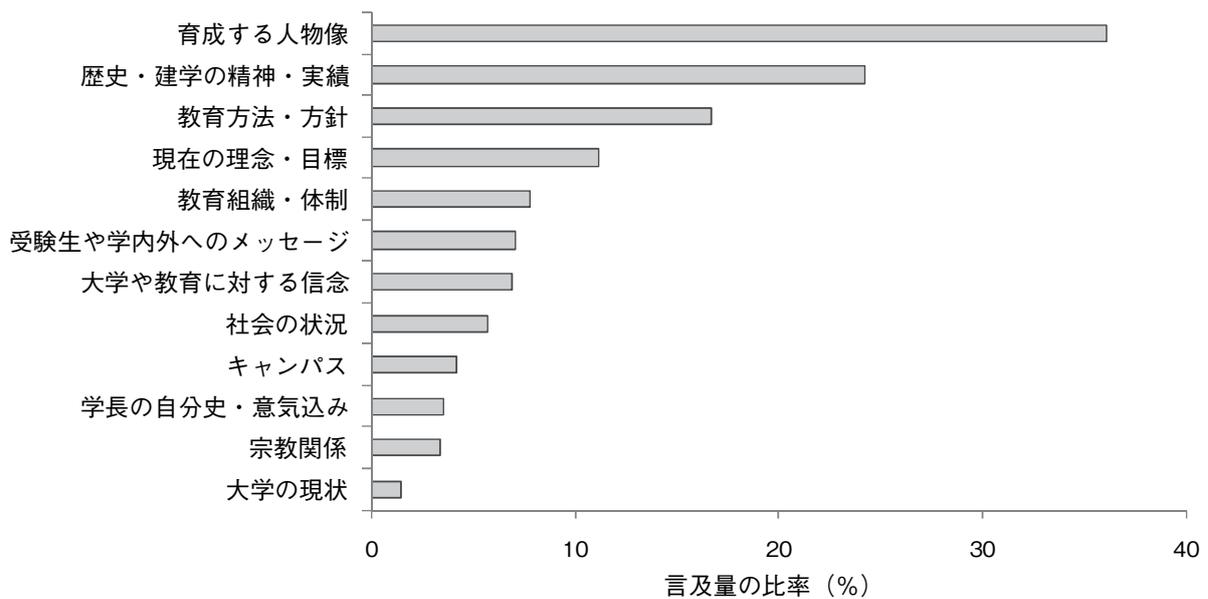
4. 分析1 ー学長メッセージの言及内容

4.1 言及内容および言及量の解明

ここから、具体的な分析とその結果を見ていこう。

まず、学長メッセージコーディングの結果、言及内容として12のコードが生成された。コードは文単位で付し、各コードの言及量の学長メッセージ全体に占める比率（各コードが付された文の文字数÷学長メッセージ全体の文字数）を大学ごとに算出した¹³⁾。

生成された12のコードおよび各コードの言及量の比率は図1の通りである。言及量の比率が最も高いのは「育成する人物像」であり、学長メッセージ全体の40%近くを占めている。言及量の比率が次に高いのは「歴史・建学の精神・実績」、3番目に高いのは「教育方法・方針」である。



注：言及量の比率＝各項目に該当する文の文字数／学長メッセージ全体の文字数×100

図1 12の言及内容コードと各コードの言及量の比率（女子大学平均）

4.2 言及内容と大学属性の関係

次に、各コードの言及量の比率と大学属性との関係を明らかにするため、対応分析を行った¹⁴⁾。

すべての言及内容コードで対応分析を行うと、「宗教関係」が外れ値になる。そして、原点から見て「宗教関係」と同じ方向の原点から離れた位置に「カトリック」がプロットされるので、「宗教関係」の言及は「カトリック」大学に特徴的な言及内容であるといえる。

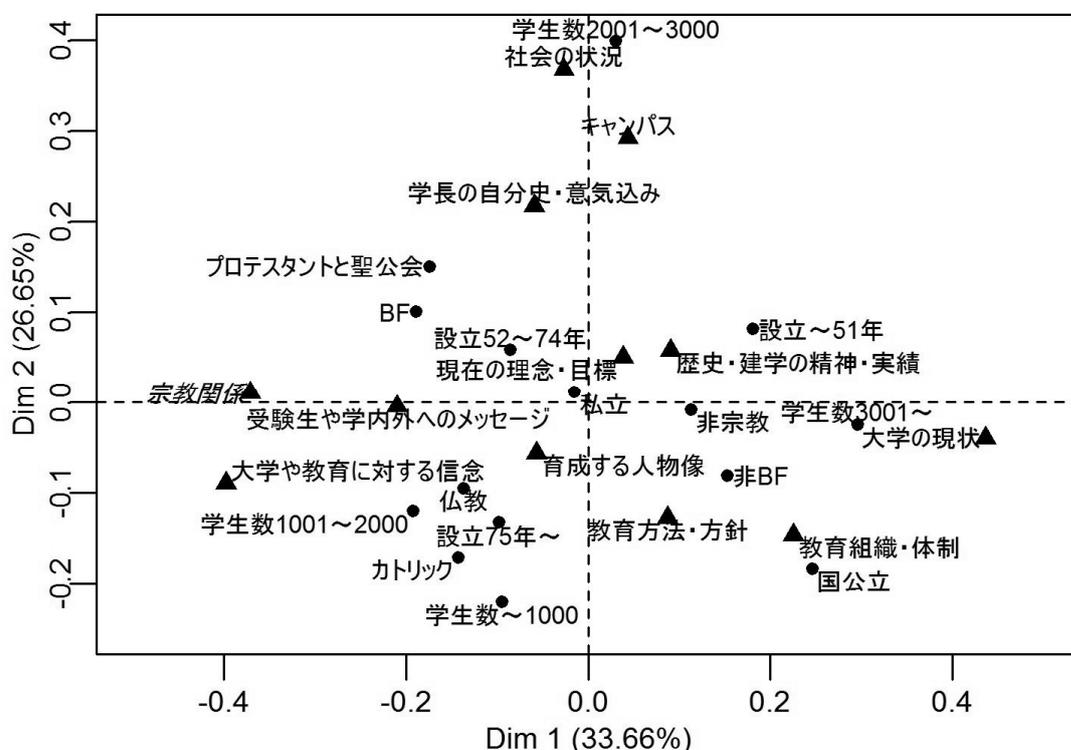
この結果をふまえ、外れ値の「宗教関係」をサプリメンタリーポイントとして扱い、再度対応分析を行った。図2はその結果の第1・2軸による座標平面である。

軸の固有値は、第1軸 33.66%、第2軸 26.65%で、この2軸で全慣性の約60%を説明している¹⁵⁾。

第1軸形成に対する寄与は、大学属性では「学生数3001～」(20.93%)、「BF」(15.71%)、「非BF」(12.67%)、「設立～51年」(10.79%)が大きく、言及内容コードでは「大学や教育に対する信念」(42.65%)、「教育組織・体制」(15.55%)、「受験生や学内外へのメッセージ」(12.19%)、「大学の現状」(10.71%)が大きい。軸形成への寄与率は高くないが、「非宗教」、「歴史・建学の精神・実績」は第1軸でよく説明されている（各ポイントの慣

性の53.1%、48.2%に第1軸が寄与)。「学生数3001~」、「非BF」、「非宗教」、「設立~51年」と同じ正の側に「教育組織・体制」、「大学の現状」、「歴史・建学の精神・実績」があり、「BF」と同じ負の側に「大学や教育に対する信念」、「受験生や学内外へのメッセージ」がある。「教育組織・体制」、「大学の現状」、「歴史・建学の精神・実績」への言及は、大規模大学、非BF大学、非宗教系大学、設立年の古い大学に特徴的といえる。また、「大学や教育に対する信念」、「受験生や学内外へのメッセージ」への言及は、BF大学に特徴的といえる。

第2軸形成に対する寄与は、大学属性では「学生数2001~3000」(45.19%)、「学生数~1000」(13.42%)が大きく、言及内容コードでは「社会の状況」(38.23%)、「キャンパス」(17.70%)、「教育方法・方針」(13.52%)が大きい。「学生数2001~3000」と同じ正の側に「社会の状況」、「キャンパス」があり、「学生数~1000」と同じ負の側に「教育方法・方針」がある。「社会の状況」、「キャンパス」への言及は「学生数2001~3000」の中規模大学に特徴的であり、「教育方法・方針」への言及は学生数の少ない大学に特徴的であるといえる。



注：●は大学属性、▲は言及内容コード、斜体文字（宗教関係）はサプリメンタリーポイント

図2 言及内容コードと大学属性の対応分析

原点に付近にプロットされている「育成する人物像」は、第 2・3 軸、第 3・4 軸、第 4・5 軸で座標平面を構成した場合も、原点から大きく外れてプロットされることはなかった。したがって、「育成する人物像」への言及は特徴的ではない、つまり、どのような大学も「育成する人物像」には言及しているということになる。

5. 分析 2 ー 育成する人物像

前節の分析において、最も言及量比率が高い内容は「育成する人物像」であった。この「育成する人物像」は、学祖が定めて現在まで受け継がれている人物像として説明されたり、現在の理念や教育方針と関連させて記述される事例が多く見られた。つまり、「育成する人物像」は幅広い事柄と関連する項目であり、大学の自己認識が最もよく表現されている項目と考えることも可能である。そこで、本節では、育成する人物像の内容に焦点を絞り、1) 多くの女子大学が共通して掲げる育成人物像は何か、2) 女子大学群の中で育成人物像にはどのような違いがあるのか、3) 育成人物像は女子大学の自己認識に揺らぎが生じた場合どのように変化するのかを分析し、女子大学の自己認識の共通項ならびに差異、および変容過程を明らかにする。なお、育成人物像コードがない 3 大学は分析から除外した。

5.1 育成人物像コードの生成と共通項

はじめに、学長メッセージに書かれている育成人物像を明らかにするため、育成人物像内容のコーディングを行い、コードを生成した。手順としては、前節の言及内容のコーディングで「育成する人物像」コードが付された文に書かれている育成人物像を切片化し、内容的に類似するコードを集約する作業を繰り返した。そして、コーディングの結果から、大学ごとに各育成人物像コードの言及の有無を記録した二値データと、コードの言及回数を記録したデータを作成した。

それでは、育成人物像としてどのようなコードが生成されただろうか。また、多くの女子大学で言及された育成人物像は何か。

図 3 に示した 15 の育成人物像が、集約を繰り返して最終的に生成した育成人物像コードである。例えば、一番上の「感性・品性・人間力」は、「私たちの大学は、豊かな感性をもつ女性の育成をめざします」というような文に付したコードである。左側のグラフは、各育成人物像コードに言

及した大学の比率（1回でも言及した大学の比率）を示したものである。最も高い比率のコードは「感性・品性・人間力」であり6割以上の大学が言及している。次いで「自立・主体性・向上心」、「社会貢献」、「専門性」、「倫理観・奉仕の精神」、「教養・知性」の比率が高い。右側のグラフは、各育成人物像コードの言及回数を分析対象女子大学数で割った、言及回数の平均である。言及率の高いコードは、言及回数も多い傾向がある。

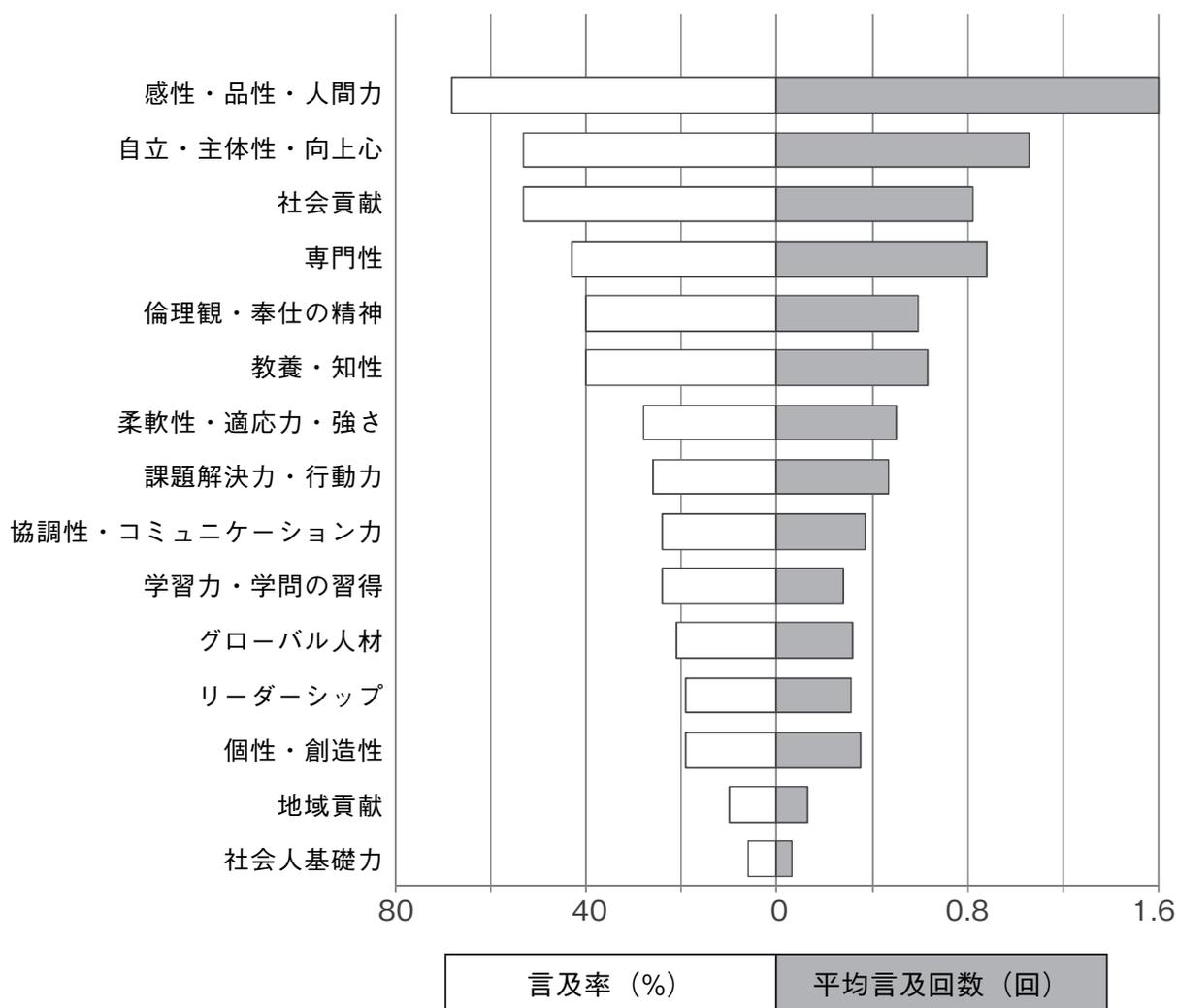


図3 育成人物像の言及率と平均言及回数

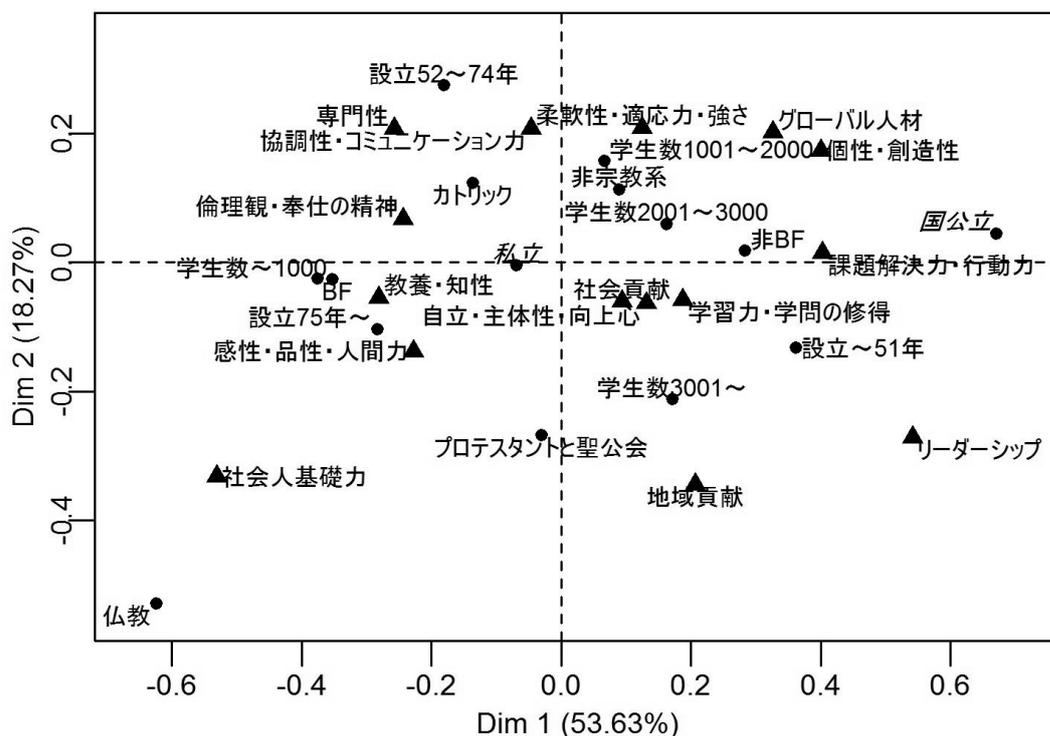
5.2 各大学の差異

女子大学群の中では育成人物像にどのような違いがあり、育成人物像相互の関係や大学の属性との関係はどのようになっているだろうか。これを明らかにするために、育成人物像コード言及回数と大学属性変数で対応分析を行い¹⁶⁾、育成人物像相互の関係や大学の属性との関係を探索的に解明した。各コードに言及したかどうかの二値データではなく、言及回数データを使用したのは、同じコードに含まれる育成人物像を繰り返し述べたり、言葉を変えて複数回述べている大学があり、言及回数を指標としたほうがより大学間の差異を表現できるためである。

図4は対応分析の結果である。設置者の属性（「国公立」と「私立」）は、「国公立」が外れ値になるため、軸の計算には用いずにサプリメントポイントとして扱った。

まず、軸の固有値を確認しよう。第1軸の固有値は53.63%で、この軸で全体の慣性の半分以上を説明している。第2軸の固有値は18.27%であり、第2軸までで全体の約72%を説明している¹⁷⁾。

第1軸形成に対する寄与は、大学属性では「BF」(23.12%)、「設立～51年」(19.51%)、「非BF」(17.43%)が大きく、育成人物像では「リーダーシップ」(16.47%)、「感性・品性・人間力」(15.10%)、「課題解決力・行動力」(13.85%)が大きい。また、軸に対する寄与は大きくないが、第1軸によってよく説明されるポイントには「学生数～1000」(このポイントの慣性の83.6%をこの軸が説明。以下同様。)、**「設立75年～」**(75.2%)、**「教養・知性」**(82.2%)が挙げられる。原点から見て「BF」「学生数～1000」「設立75年～」と同じ第1軸の負側に「感性・品性・人間力」「教養・知性」が布置されている。また、原点から見て「設立～51年」「非BF」と同じ第1軸の正側に「リーダーシップ」と「課題解決力・行動力」が布置されている。ここから「感性・品性・人間力」「教養・知性」はBF大学、設立の新しい大学、学生数の少ない大学に特徴的な育成人物像であり、「リーダーシップ」や「課題解決力・行動力」は設立年の古い大学や非BF大学に特徴的な育成人物像であるといえよう。



注：●は大学属性、▲は育成人物像コード、斜体文字（国公立・私立）はサブメンタリーポイント

図4 育成人物像コードと大学属性の対応分析

第2軸形成に対する寄与は、大学属性では「設立52~74年」(25.52%)、「プロテスタントと聖公会」(18.64%)が大きく、育成人物像では「専門性」(20.28%)が大きい。軸への寄与は大きくないが、第2軸によってよく説明されるポイントには「協調性・コミュニケーション力」(66.6%)、「地域貢献」(40.3%)、「柔軟性・適応力・強さ」(36.0%)がある。原点から見て「設立52~74年」の側（正側）に「専門性」、「協調性・コミュニケーション力」、「柔軟性・適応力・強さ」があり、「プロテスタントと聖公会」の側（負側）に「地域貢献」がある。

5.3 変容のあり方

組織に重大な出来事が生じることは、自己認識が変容する契機になると考えられる。女子大学にとって自己認識の根幹が揺らぐような出来事とは、共学化であろう。女子大学が共学化した場合、その自己認識から何が消え、何が出現するのであるだろうか。これを検討することは、女子大学の自己認識とは何かを、女子大学群内部に着目した前節までの分析とは異なる角度から捉えることにつながる。しかし、共学化した大学の学長メッセージ

を、共学化前にさかのぼって調査することは、資料が存在しないため不可能である。そこで次善の策として、女子大学から共学化した大学の学長メッセージを分析し、女子大学群との違いを見ることを通じて、この問いに迫る。具体的には、育成人物像内容コードの言及回数を女子大学と共学化大学で比較し、言及回数に有意差がある育成人物像を明らかにする。

図5は、各育成人物像コードの平均言及回数を「女子大」「共学化大」別に示したものである。平均値の差の検定の結果、女子大学が共学化大学よりも有意に多く言及した育成人物像コードは、「感性・品性・人間力」、「自立・主体性・向上心」、「社会貢献」、「リーダーシップ」の4つであった。

一方、共学化大学が女子大学よりも有意に多く言及した人物像は「地域貢献」のみであった。共学化により言及回数が増える育成人物像は、言及回数が減る育成人物像と比べて、少ない。

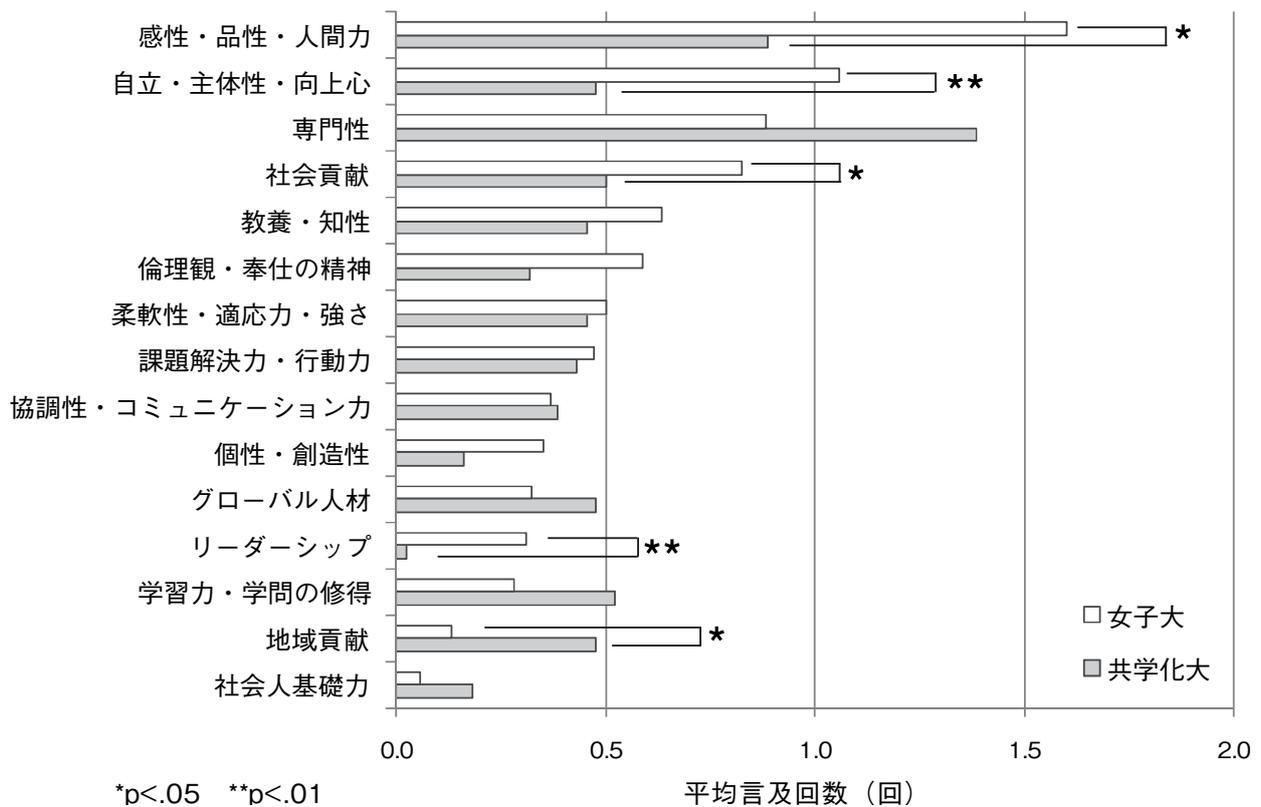


図5 女子大学と共学化大学の育成人物像コード平均言及回数

6. 考察

これまで現代女子大学の自己認識について分析を進めてきたが、その結果を整理しておこう。

まず、学長メッセージで述べられる内容を分析すると、「育成する人物像」の言及量が最も多く、次いで「歴史・建学の精神・実績」、「教育方法・方針」が続いている。設立年の古い女子大学も多いため、創設経緯やその後の歴史に依拠するケースが最も多いと予想していたが、むしろ結果は将来を見据えた具体的な育成像についての言及量の方が多かった。その意味では今日の女子大学の自己認識は未来志向的と言えるかもしれない。ただし属性との関連を見ると、歴史が古い大学、大規模大学、非 BF 大学、非宗教系大学では、その規模や組織の面から教育組織・体制や大学の現状について言及する傾向がある一方、宗教系大学や BF 大学では大学教育に対する信念や受験生や学内外へのメッセージを語る傾向が強く、さらに中規模大学では社会の状況やキャンパスについての言及が特徴的であることがわかった。女子大学の属性によって自己認識ならびに外部環境の認識・対応も大きく異なることが示唆されている。

次に最も言及量が多かった育成人物像の言及内容についてさらに精査すると、「感性・品性・人間力」を挙げる大学が6割を越え最も多く、次いで「自立・主体性・向上心」「社会貢献」「専門性」「倫理観・奉仕の精神」「教養・知性」と続く。これらの育成人物像は学長メッセージ内での平均言及回数も多いことも考え合わせると、これらは女子大学群が育成をめざす人物像の中核的要素であるといえる。また、これらを大学属性でプロットしてみると、「感性・品性・人間力」「教養・知性」は、とくに BF 大学や設立年の新しい大学で多く言及される傾向がある一方で、設立年の古い大学では「リーダーシップ」、非 BF 大学では「課題解決力・行動力」への言及が顕著である。さらに専門性やコミュニケーション力や適応力といった学力とは異なる能力は、大学拡大期に設立された大学に特徴的といえるだろう。このように、各女子大学の掲げる育成人物像は偏差値構造および伝統校か否かの影響を強く受けており、学長メッセージで語られる大学の育成人物像は、内面的に豊かな人間像と社会的に活躍する人間像に大きく二分されていることが明らかになった。

さらに女子大学から共学化すると、女子大学が最も多く言及する「感性・品性・人間力」「自立・主体性・向上心」という内面的に豊かで主体的な人

物像が、育成人物像として掲げられなくなる傾向があることがわかった。また、学長メッセージにおいて女子大学の存在意義を説明する文脈で書かれるケースが散見された「リーダーシップ」や「社会貢献」も取り下げられる傾向があることがわかった。逆に言えば、女子大学から共学化した際に言及されることが少なくなったこれらの項目こそ、現代女子大学が自己の重要な機能・役割として認識している要素であるともいえるだろう。

さいごに上記の分析結果から、現代女子大学の自己認識とその構造について考察しておきたい。大きくいえば、女子大学が掲げる育成人物像は感性豊かで品性のある人物といった、一般的に「女性らしい」とされるイメージを用いた育成人物像と、リーダーシップのある人物・課題解決力や行動力のある人物といった社会で活躍する育成人物像に二分されている、と言える。そしてこの2つの対置される育成人物像は、規模、歴史、BF かどうかなどと関連性が認められたが、わが国ではこれらの属性は大学の偏差値構造を反映したものである。つまり、各女子大学の言及内容や育成人物像、すなわち「我々は何者であるか」「我々はどのような人物を育成するか」という自己認識は、わが国の高等教育自体が孕むハイアラーキーな構造によって規定されている、とも言い換えられるだろう。

自己認識が組織を取り巻く外部環境によって規定され、また他の組織との関係性の中で自己のあり方を決定することを考え合わせれば、こうしたことはある意味当然とも言えるだろう。しかし、現代女子大学の場合、それらを支えてきた地位達成・地位表示機能の需要が減少し、相対的な地位が低下するという逆風の社会環境において、大学自身が経営を続けていくために他との差別化を図る必要性を認識しているはずである。たしかに、女子大学は共学化した大学とは異なる自己認識を有していた。しかしながら、女子大学群内部における大学の自己認識は偏差値構造の制約の中で二分化された図式に陥ってしまっており、偏差値構造にとらわれない差別化が行われているとは言い難い状況であった。このような現代女子大学の型にはまった自己認識は、大学の多様化・差別化・個性化戦略の足枷となっているとも言えるかもしれない。

注

- 1) 2015年12月現在。4年制大学数は『学校基本調査』。
(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001011528>, 2016.8.20)
女子大学数は平成27年度版『全国大学一覧』より算出。
- 2) 2014年度。4年制大学は3011校、うち女子大学は40校 (primarily for womenの女子大学を含む)。Digest of Education Statistics。
(https://nces.ed.gov/programs/digest/d15/tables/dt15_317.10.asp, 2016.8.19)
ただし、女子大学数についてはThe Women's College Coalitionなどを参考に独自調査。
(<http://www.womenscolleges.org/>)
- 3) 2016年現在。4年制大学は1236校、うち女子大学は3校。中華人民共和国教育部「2016全国高等学校名单」。
(http://www.moe.gov.cn/srcsite/A03/moe_634/201606/t20160603_248263.html, 2016.8.15)
- 4) 2012年現在。一般的な4年制大学は189校、うち女子大学は7校。安東(2013: 63, 73)より算出。
- 5) 『蛭雪時代 2016 8月臨時増刊 全国大学内容案内号』「駿台&河合塾偏差値・難易度一覧」より算出。
- 6) なお、学長の言説に着目した分析としては、橋本(2016)を参照のこと。
- 7) ここで取り上げる、女子大学に共通した要素、他の大学との差異、さらにその変容のあり方という側面については、組織アイデンティティ論(OI: Organizational Identity)が提起する「中心性(中核性)」「特異性(独自性)」「持続性(連続性)」という3つの特徴からアイデアを借りている(Albert and Whetten 1985)。しかし本研究では学長(の言説)を構成員(教職員)の認識が集約されたものとして見立てた上でその分析に限定しており、OIの解明に不可欠な構成員全体の認識についての量的・質的調査を欠いている。ちなみに、学長(の言説)を取り上げる点に関して言えば、むしろ「組織の外部のステークホルダーに向けて、組織の中心的で特異なアイデアをいかに表現し、伝えるかに関係するマネジメント志向・マーケティング志向の概念である」コーポレート・アイデンティティ(CI)論(間嶋 2008: 13)、もしくは「リーダー自身にシンボリックな要素を見だし、多様な当事者による解釈の資源と捉え」て「リーダーをシンボリックなメディアとして分析する」組織シンボリズム論(竹中 2002: 47)などのアプローチも有効であるだろうが、これらの(高等教育研究への)方法論についての詳細な検討は今後の課題としたい。
- 8) 学長メッセージが存在しない大学は、女子大学6大学、共学化大学3大学である。

- 9) 各大学の自己認識の考察には、認証評価、自己評価点検報告書、アドミッション、カリキュラム、ディプロマに関する3つのポリシーなどを分析することもあり得るが、これらのテキストでは文言ならびに内容ともに大学ごとの特徴や差異が明確に抽出できなかつたため、本研究ではそれぞれの差異化戦略がより顕著に表れる学長メッセージに着目した。
- 10) 朝日新聞社『2017年版大学ランキング』より引用。
- 11) 『蛭雪時代 2016 8月臨時増刊 全国大学内容案内号』「駿台&河合塾偏差値・難易度一覧」記載の河合塾各大学偏差値において、各大学中の入試方式中偏差値に一つでもBFがついていた場合はBF大学とみなした（音楽、書道など実技の専攻のBFは除く）。
- 12) 聖公会とプロテスタントの大学はいずれも「キリスト教学校教育同盟」に加盟しているため、一つにまとめた。
(<http://www.k-doumei.or.jp/>, 2016.8.19)
- 13) 一文に複数のコードが該当する場合は、該当するすべてのコードを同じ文に付した。また、見出しも一文と捉えた。
- 14) 対応分析にはパッケージ FactoMineR を用い、クローセン (2015) 第4・11章、Greenacre (2007) Chap.17 を参考にした。まず、各言及内容コードについて、属性ごとに属性を構成する大学の言及量比率を合計した。そして、表頭を言及内容コード、表側を大学属性とする二元表を作成し、各属性の二元表をつなぎ合わせた積み重ね表を用い、対応分析を行った。
- 15) 第3軸以降の固有値は、第3軸 21.21%、第4軸 7.07%、第5軸 6.30%で、第5軸で固有値の累計が90%を超える。
- 16) 各大学属性に該当する大学をグループ化し、各育成人物像コードの言及回数を合計した二元表を積み重ねた多重回答表で対応分析を行った。
- 17) 第3軸の固有値は11.26%、第4軸の固有値は7.29%であり、第4軸で固有値の累計が90%を超える。

参考文献

- Albert, Stuart. and Whetten, David. A., 1985, "Organizational identity", *Research in Organizational Behavior*, 7: 263-95.
- 天野正子、1985、「学歴の社会的機能についての一考察：学歴エリートの妻の学歴を事例として」『大学論集』14: 19-40。
- 天野正子、1986、「戦前期・近代化と女子高等教育－性別役割「配分」の定着過程」『女子高等教育の座標』垣内出版、30-58。
- 安東由則、2006、「日本の女子大学に関する研究（Ⅱ）－クラスター分析による分類の試み－」『武庫川女子大学教育研究所研究レポート』36: 117-30。
- 安東由則・鎮朋子、2008、「女子大学の自己像－大学案内パンフレットと自己

- 点検・評価報告書の分析から－』『武庫川女子大学教育研究所研究レポート』38: 121-56。
- 安東由則、2013、「韓国における高等教育政策の動向と大学の現況」『武庫川女子大学教育研究所研究レポート』43: 53-88。
- 青柳幸一、1986、「国公立女子大学の憲法適合性：高等教育における差別」『横浜経営研究』6(4): 305-22。
- 馬場さやか、2005、「女子大学の存在意義－女子のみの教育環境がもつ意味－」『人間研究』41: 95-103。
- クローセン、S. (藤本一男訳)、2015、『対応分析入門 原理から応用まで』オーム社。
- Greenacre, Michael J., 2007, *Correspondence Analysis in Practice*, Boca Raton, Fla: Chapman & Hall/CRC.
- 橋本ヒロ子、2007、「女性に対する理工系教育推進における女子大学の可能性」『社会情報論叢』10: 1-32。
- 橋本鉦市、2016、「大学の自己認識に関する一試論：東大総長の入学式・卒業式辞内容の計量テキスト分析から」『東京大学大学院教育学研究科紀要』55: 129-38。
- 畑中理恵、1999、「京阪神における女子高等教育の成立事情：大正期の女子大学抑止政策の展開と地域における対応関係」『日本教育政策学会年報』6: 139-54。
- 井上俊也、2014、「女子大学のキャリア教育における参謀型人材の育成」『人間生活文化研究』24: 1-21。
- 井上靖子・大西加愛・難波美都里・堀内圭子、1996、「女子大イメージの虚と実－パンフレットは何を語るのか」『人間関係論集』13: 147-89。
- 磯野有秀、1994、「女子教育論序説－女子教育の限界と展望」『新・女性と家族 自立と共生の指標』創言社、193-243。
- 河上婦志子、1986、「女子大学－存続の方向を探る－」天野正子編著『女子高等教育の座標』垣内出版、140-55。
- 喜村仁詞、2011、「女子大学における学生満足度の向上を通じたブランド戦略」『経営戦略研究』5: 97-108。
- 真橋美智子、2012、「新制女子大学の誕生までの経緯と初期の女子大学：日本女子大学の例を中心に」『日本女子大学紀要 人間社会学部』23: 13-28。
- 間嶋崇、2008、「組織アイデンティティと組織不祥事」『専修大学経営研究所報』174: 1-28。
- 三宅えり子、2009、「女子大学と共学大学における女子教育力の比較研究－試行的調査から」『同志社女子大学学術研究年報』60: 19-30。
- 森山由紀子、2005、「女子大学 HP 学長メッセージに見る、女子大学とジェンダー」『同志社女子大学 総合文化研究所紀要』22: 5-15。

- 村田鈴子、1983、「女子大学の存在意義」『群馬県立女子大学紀要』3: 97-114。
- 岡田典子、2002、「私立大学の建学精神の類型－女子大学の位置づけ－」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部』51: 27-36。
- 佐野享子、2002、「私立大学の個性の特質とその戦略意図に関するマーケティング論的研究：女子大学における学生募集に焦点を当てて」『筑波大学教育学系論集』26: 1-14。
- 佐藤瑞枝、1994、「女子大－その過去と現在」『福岡県女性史・女性学ノート』2: 27-41。
- 竹中克久、2002、「組織文化論から組織シンボリズムへ－＜シンボルとしての組織＞概念の提唱－」『社会学評論』53(2): 36-51。
- 山田昇、1984、「国立女子大学創設に関する考察：奈良女子大学の場合」『奈良女子大学教育学年報』3: 1-27。
- 山本和代・藤村久美子、2000、「女子大学の存在意義に関する比較研究－アメリカ・イギリス・韓国・日本－」『人文・社会科学論集』18: 121-89。
- 湯川次義、2013、「戦後の旧学制下における女子大学設立構想に関する一考察：教育理念と学部構成を中心に」『学術研究 人文科学・社会科学編』62: 35-51。

